

私の世界にて

トライ式高等学院 阿部 由依

発達障害（はったつしょうがい、英: Developmental disability、DD）は、身体や、学習、言語、行動の何れかにおいて不全を抱えた状態であり、その状態はヒトの発達期から現れる、

私は弟と会話をしたことが『ない』。

大好きなゲームで遊んだことも、宿題のわからない問題を教えることも、バレンタインにチョコを何個もらえたか揶揄うことも、当然したことがない。

『ある』ことといえば、共働きの両親に代わって放課後等デイサービスから弟を引き取る為に友達からの誘いを断ったり、弟が強請ったご飯の用意をしたり、感情のコントロールが出来ない弟によく暴力を振るわれることぐらいだろうか。

これが、私の世界の常識。物心ついたその時から、ずっと。

だが、私は決してこの環境を憎んでいる訳ではない。そりゃあ、弟の口から「お姉ちゃん」という言葉が聞けないことや、友達と満足に遊べないことに全く悲しくない訳ではなかったけれど、それらが自身のたった一人の弟である彼への愛に勝ったことなどないから、何も苦に感じることなどないのだ。

いや、嘘だ。たった一度だけ、私の世界を、弟を、心の底から憎んだことがあった。

私は小さい頃から、自分たちが普通に出来ることが出来ない弟を、自身や周りの子とは少し違うと思っていても『変』だと思ったことはなかった。そのため他人に弟のことを聞かれた時、発達障害のことを隠さず話していた。

ある日のお昼休みの事、小学4年生の私は当時仲良くしていた男子たちに「今日の放課後公園で遊ぼう。」と誘われた。ちょうどその日は弟を引き取る為に家にいなければ行けなかったもので、正直に

「ごめんね。今日弟がデイサービスだから行けないや。」

と断った。するとそのうちの一人が怪訝な顔をしながらこう言った。

「お前の弟もだけど、お前はもっと変だよな。恥ずかしくないのかよ。」

それを聞いた途端、頭を劈くような耳鳴りがした。頭が真っ白になって、そこからどうしたのかよく覚えてないが、気がつくとき家にいた。

いつもより不機嫌な様子で泣き叫ぶ弟に好物のフライドポテトを作っていると、ふと昼に言われた言葉が頭をよぎる。忘れようと首を振っても、あの哀れみの目が、軽蔑する声が私にじっとりと纏わりついてきて離れなかった。

またあの耳鳴りがする。

息が詰まって頭が回らなくなってきた頃。弟が目に入った。そして何かに取り憑かれたように私はこう呟いた。

「あんたがいなければ。」

またあの耳鳴りがする。

2017年某日。逢魔時。私は弟に包丁を向けた。

涙と震えで刃先が歪む。私はひゅーひゅーと浅い呼吸をしながら、弟に一步、また一步と近づいていく。あと数歩のところまで弟が不安そうな顔でこちらを見た。そのあまりにも辛そうな顔に私は息を呑み、思わず包丁をその場に落とした。包丁が落ちた音で我に返った私は刃先を踏みつけるのも気にせず弟を力一杯抱きしめた。そうしている内に、いつの間にか耳鳴りは止んでいた。

あなたは今までの人生で、あの男子のように自分の世界の常識に当てはまらない他人を白い目で見て氷水を浴びせるようなことをしたことがないだろうか。それぞれの人間を取り巻く環境が違う限り『常識』に差が出てしまうことはどうすることも出来ないけれど、一つ、あなたの世界の当たり前を押し付けたその瞬間に誰かの世界を跡形もなく崩壊させてしまうかもしれないということだけをどうか忘れないでほしい。

出典: 「発達障害」フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』